

てんじゆつぎよつじゆほうせん  
 転重軽受法門

すりはんどく

周利槃特と申すは兄弟二人なり。一人もありしかば、すりはんどくと申すなり。各々三

おのおの

人は又かくのごとし。一人も来らせ給へば三人と存じ候なり。

涅槃經に転重軽受と申す法門あり。先業の重き、今生につきずして未来に地獄の

てんじゆつぎよつじゆ

せんごう

こんじよう

じじく

苦を受くべきが、今生にかゝる重苦に値はせ候へば、地獄の苦しみはつときへて、死に

じゆつく

あ

候へば人・天・三乗・一乗の益をうる事の候。不軽菩薩の悪口罵詈せられ、杖木瓦礫

ふきよつぼさつ

あつくめり

じようもくがりやく

をかほるも、ゆへなきにはあらず。過去の誹謗正法のゆへかとみへて、「其罪畢已」と

ひほうしじようほう

こゝにいひつち

説かれて候は、不軽菩薩の難に値ふゆへに、過去の罪の滅するかとみへはんべり是

あ

これひとつ

又付法蔵の二十五人は仏をのぞきたてまつりては、皆仏のかねて記しをき給へる権者

ふほつぞう

ほとけ

しめ

こんじや

なり。其の中に第十四の提婆菩薩は外道にころされ、第二十五の師子尊者は檀弥栗王に頸

だいばぼさつ

げどう

ししそんじや

だんみりおう

くび

を刎られ、其の外、仏陀密多・竜樹菩薩なども多くの難にあへり。又難なくして、

はね

ほか

ぶつだみつた

りゆつじゆぼさつ

竜

樹菩薩

なども

多くの

難にあ

へり。

又難

なく

して、

王法に御歸依いみじくて、法をひろめたる人も候。これは世に悪国・善国あり、法に撰受  
きえ  
 ・折しゃやく伏あるゆへかとみへはんべる。正し像猶かくのごとし。中ちゆう国又しかなり。これは  
はじめ  
 辺土へんどなり。末法の始なり。かゝる事あるべしとは先にをもひさだめぬ。期しをこそまち候  
これふたつ  
 ひつれ。是 一一。  
かみ  
 この上の法門は、いにしえ申しをき候ひき。めづらしからず。  
えんぎよつ 教の六即の位くらゐに觀行即と申すは、しよぎよつによしよん所行如所言、しよごんによしよぎよつ所言如所行（行ずる所言  
りそく 理即・名字みょうじの人は円人えんにんなれども、言ことば  
まことのみありて真なる事かたし。例せば外典げてんの三墳さんぶん・五典等は読む人かみずをしらず。かれ  
 がごとくに世ををさめふれまう事、千万が一つもかたし。されば世のをさまる事も又かた  
かみつきし。法華経は紙付こえに音をあげてよめども、彼かの經文のごとくふれまう事わかたく候か。  
ひゆほん譬喩品に云く、「經どくじゆを誦しよ誦じゆし書持しよじすることあらん者を見て、きようせんぞうじつ輕賤憎嫉けつこんして結恨いたを懷  
ほつしほんかん」。法師品に云く、「如來にやらいの現在げんざいすらなお怨嫉おんじつ多し、いわんや滅度めつどの後のちをや」。

勸持品かんじほんに云く、「刀杖とうじょうを加え、乃至ないし、数数しばしば擯出ひんすいせられん」。安樂行品あんらくぎょうほんに云く、「一切世間いっさいせけん、怨多あたおくして信しん難がたし」と。此等は經文には候へども、何世いつのよにかゝるべしともしられず。過去の不輕菩薩ふきょうぼさつ・覺徳比丘かくとくびくなどこそ、身にあたりてよみまいらせて候ひけるとみへはんべれ。現在には正像しやうざう二千年はさてをきぬ。末法に入つては、この日本国には、当時たうじ(事)は日蓮一人みへ候か。

昔の悪王の御時、多くの聖僧せいそうの難がたに値あひ候けるには、また所しよじゆう 従けんぞく・眷属等でし・弟子だんな・檀那だんな等らいくそばかなげき候ひけん、今をもちてをしはかり候。今日蓮、法華經一部よみて候。一句一偈いっくいちげに猶受記なおいゆきをかほれり。何なにに況なんや一部いちぶをやと、いよ／＼たのもし。但ただをほけなく国土までとこそ、をもひて候へども、我われと用もちひられぬ世なれば、力及ばず。しげきゆへにとどめ候。恐々謹言。

文永八年 辛未 十月五日

日蓮 花押

大田左衛門尉殿

蘇谷入道殿 そや

金原法橋御房 かなはらほつきよ

御返事